

藻場の再生による磯根資源の回復

日和佐藻場再生委員会

日和佐地区について

日和佐地区は、徳島県南東部に位置する美波町にあり、太平洋に面する。海岸線は風光明媚なりアス式で、アカウミガメの産卵地もある。

地区の産業は、古くから漁業が中心。また、四国八十八カ所二十三番札所「薬王寺（建立 726 年）」や「ウミガメ博物館」、二百年以上続く伝統の祭り「日和佐八幡神社まつり」などの名所や行事があり、年間 100 万人近い観光客が訪れる。



藻場の現況

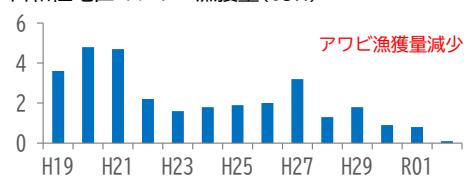
漁業の町である当地区では、近海で行われるマグロやカツオ漁、沿岸の釣りや大型定置網がかつて盛んであった。しかし、近年、これら漁業の不振から、磯根資源を対象とした漁業に変化した。

磯根漁業は、イセエビを対象とする磯建網、アワビやトコブシ、サザエを対象とする海士漁が主に営まれる。このうち、イセエビは、自主的な資源管理によって、現在、県内最大産地となっている。一方、アワビ等の貝類の漁獲量は減少しており、その資源回復が課題となっている。

アワビ等の減少要因は、藻場の衰退が一因している。かつて当地区の磯場には、カジメやアラメ（以降、アラメ・カジメ類）が水深 10m 付近まで密生していた。しかし、これら大型海藻が 10 年以上前から著しく減少し、点生するだけとなった。

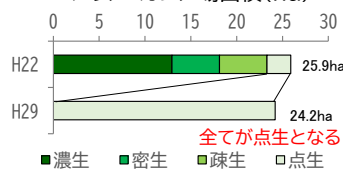
藻場は、地区にとって重要な磯根資源の生産基盤である。町の漁業を持続する上でも、その再生が求められている。

日和佐地区のアワビ漁獲量(ton)



アワビ漁獲量減少

アラメ・カジメ場面積(ha)



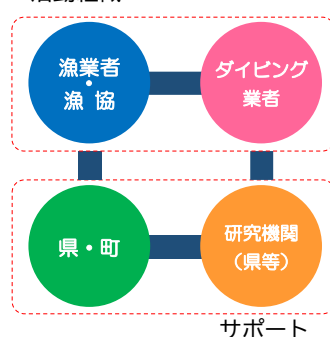
全てが点生となる

組織の設立および活動方針

上記課題から、当地区の漁業者が中心となり、平成 30 年度に「日和佐藻場再生委員会」を設立し、藻場の再生を目標に活動を開始した。

組織体制は、海女漁を行う漁業者だけでなく、当地区のダイビング業者も構成員とした。活動方針は、以下のとおりである。

活動組織



① 母藻の設置

アラメ・カジメ類の衰退によって種の供給量が減少していることから、人為的に母藻を投入し、種の供給不足を解消し、藻場の回復を図る。

② ワカメロープの設置（ワカメ種苗の投入）

藻食性魚類が少ない時期に繁茂するワカメの種苗を投入し、春藻場の形成を促進する。

③ モニタリング

活動区域に定点を設け、大型海藻の被度を定量・定期的にモニタリングし、活動の効果を検証し、次年度の活動計画に反映する。

藻場の再生に向けた取り組み

(1) 母藻の設置

母藻の設置は、アラメ・カジメ類を対象に行う。設置は、晩秋～初冬。用いる母藻は、近隣の天然藻場で採集する。方法は、成熟した母藻の葉部を浮子と一緒に網袋に入れ、コンクリートブロックに縛り、船上から投入。投入数は年間約 200 袋で、事前に岩盤清掃を行った場所に投入するようにしている。



(2) ワカメロープの設置（ワカメ種苗の投入）

カジメ類の回復は、藻食性魚類による食害や台風による攪乱で効果がすぐに現れない。そこで、これら阻害要因が少ない春季に一定規模の群落が形成するワカメの種苗投入を行っている。

種苗投入は、ワカメ幼体を 30～40cm 間隔でロープに挟み、そのロープ（20m）を延縄式で船上から設置する方法で行う。ロープ回収は、生長したワカメが種を飛ばし終える 4 月で、翌春のワカメ場形成を促す。



(3) モニタリング

モニタリングは、協定範囲内の 11 箇所に定点を設け、藻場のサポート専門家（全漁連を通じて派遣）と一緒に調査する。モニタリング時期は、春（5 月）と秋（10～11 月）の年 2 回を原則としている。観察項目は、海藻景観被度やウニ類や有用種の密度、サンゴ着生状況等である。



活動の成果と課題

藻場の再生にむけた取組は、平成 30 年度にスタートしたばかりで、まだ大きな効果は得られていない。ただし、活動開始 1 年後の春にワカメ被度が 50%を超える地点が認められたり、アラメの幼体が 60 本/m²確認される地点が得られたりしている。また、当会の活動に、ダイビング業者だけでなく、ボランティアダイバーが参加するなど、体制の強化が図られるようになった。

今後も引き続き、専門家の協力を得ながら活動を継続し、藻場の再生を図っていききたい。また、アワビやトコブシ、サザエなどの資源管理を進めながら、磯根資源の回復を図りたい。

